掌編匣

榛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

掌編匣

【Ｎコード】

Ｎ７８０１Ｙ

【作者名】

榛

【あらすじ】

掌編小説（１０００字以内）を掲載する場所です。

【三題噺】友人サイト「ひのまるいちご」にて行われた三つのお題で掌編を作成する企画にて作成した作品。

【Ｒａｐｉｄ－Ｆｉｒｅ　１レス小説大会】短編競作サイト「Ｒａｐｉｄ－Ｆｉｒｅ」にて行われた１レス（＝５００字程度）小説大会にて作成した作品。

桃色烏天狗

「ねぇーまま、あのひとおかおがへんだよ」
テレビを見ていた息子のあげた声に洗濯物を干す手を止め目をやると、息子はテレビに大きく映った脂で額を光らせている大臣を指差し首を傾げていた。
「どうして？　マー君、あのおじさんのお顔は変じゃないよ」
「だって、ぴんくのおかお……」
更に首を傾げる息子に言われ、よくよく見てみれば、大臣の奥に映る人たちの一人、若い男がピンク色の立体マスクをしていた。
「あぁ、烏天狗マスクか……」
つい口を突いて出たのは、立体マスクの先がシュッと尖っているところから、私が街中で見る度に密かに思っていたことだ。あの形といい付ける位置といい、烏天狗のくちばしに似てるんだよね。
「から、てぐ？」
「いいのいいの。あのお兄さん、風邪でもひいてるんだよ。あのピンク色のはマスクだよ」
「ぼくもしたいっ！」
カラン、と息子が動くのにあわせて、頭の下に敷いた氷枕が鳴る。
「じゃあ元気になったら、買ってあげるね」
そう言う私に少しむくれた顔をする息子の、まだ熱の残るおでこを撫でる。
「ままぁ」
「なあに？」
「やすそくだよ」
「うん、約束」
布団からのびてきた小さな小指と指切りをし、布団をかけ直して

やる。息子は嬉しそうに笑った後、再び瞼を下ろした。

君が治る頃には、もうあのマスクは必要ないかな。

桃色烏天狗（後書き）

題：大臣、ピンク、嬉しい

２００９０３１５：初出（三題噺参加作品）　２０１１１１１０１：移植　２０１１１１２３：編集

みかんの人生

ちぃ、と障子の外から声がした。
朝食にと炬燵の上に用意した納豆に伸ばした手を止め、目をやる。
ちぃ、ちぃちぃ。
真白な障子紙に落ちる影は、小さな觜(くちばし)を開き囀(さえず)っている。呼ばれている、何故だかそんな気がした。腰をずらし庭に面する障子を横に滑らせると、白梅の綻びはじめた枝で小鳥が羽を休めていた。
「お前、連れはどうした」
桟に腕を乗せ問うと、暗褐色のその鳥は少し首を傾け、ちぃ、と一声鳴いた。
「去年は一緒に来ていただろう」
ちぃ。
「添い遂げなかったのか」
ちぃ、ちぃ。
「……そうか。蜜柑でいいか」
ちぃ。
節々の軋む体を動かし、山のように盛られた蜜柑から一つ手に取る。輪切りにしようと思ったが手近に刃物が見当たらず、取りに行くのも億劫に思いその場で皮を剥いた。厚い外皮を剥き、白い筋を無視して房を包む薄皮の端を糸切り歯で食い千切る。薄皮を捲ると瑞々しい粒が零れんばかりであった。
ちぃちぃ、と急かすように鳥が鳴く。白く縁取られた瞳はぬいぐるみのように丸く、蜜柑を熱心に見つめている。
「ほら、これだろう」
皺の目立つようになった掌に蜜柑を乗せ、差し出した。鳥は臆する事なく掌の端に留まり、小さな觜で粒を摘んでは飲み込む。

「……わしもな、添い遂げられなかったんだ」
随分昔にいなくなってしまった妻を思い出す。
仕事が次から次へと舞い込み、付き合いを大事にしなくてはならず、家庭を顧みる暇はなかった。ある日接待を終えて帰ると、妻の代わりに白い封筒が机の上で待っていた。これは報いなのか。今までの人生を、否定された気がした。独り暮らしにも慣れ、定年を迎え、最期まで独りなのだと思っていた。そうしなければいけないと。
買い物からの帰り道、ある家の庭の木に輪切りの蜜柑が刺さっていた。仲睦まじそうな暗褐色の鳥が二羽、交互に啄(つい)ばんでいた。生け垣の向こう、縁側で嬉しそうにその様子を眺める老婦人がいた。午後の日差しを浴びたその笑顔に、長らく騒いだことのない胸が激しく騒いだ。彼女がかけてくれた声が、甘い広がりとともにいつまでも耳の奥に残った。
「老いらくの恋、というのも悪くないな」
名も知らぬ鳥が蜜柑を食べ終えて、まだ冷たさの残る空高く、飛び立っていった。

みかんの人生（後書き）

題：納豆、おいら、ぬいぐるみ

２００９０３１５：初出（三題噺参加作品）　２０１１１１１０１：移植　２０１１１１２３：編集

蔵の夢

「っかしーな、確かここら辺のはずなんだけど……」
「お前の記憶違いじゃねぇの？」
「や、確かに蔵のここら辺だって婆ちゃん言ってた」
「んな夢で言ってたこと真に受けんなよ」
「お前にはわからんって。毎晩毎晩死んだ婆ちゃんに夢枕に立たれて『ゆう～、蔵ん中さ入れた桐箱を探してけろ～』『ゆう～、桐箱さ見つかったか～』って言われ続けてみろよ、探さなきゃおられんくなるから」
「そりゃご愁傷さま。てかさ、何で同じ家に住んでた俺じゃなくて柚（ゆう）の方に化けて出るわけ？」
「知らんよ。聞いたらさ、夢を渡るのにお前より僕のが相性良かったらしいね」
「夢を渡る？　……お前も昔っから変な事に巻き込まれるよな」
「その言葉、そっくりそのまま返すよ」
「お互い様か。あー腰痛ぇ」
「文句なら婆ちゃんに言えよ。僕だって腰痛いし」
「前屈みしっぽってやっぱキツいよなー。腰パキパキ言うし」
「僕も」
「なんか懐中電灯の具合も悪いしさ。さっきからちらつくんだよな」
「電池なくなってきてるんじゃない？」
「かもな。放置されてたやつ拝借してきたから」
「してくるなよ」
「一応借りるって言ってきたし」
「誰もいない空間に向かって？」
「そうそう。……なんで柚はわかるかね」

「だってお前単純だもん」
「あっそ。マジで電池ヤバそうだから換えてくるわ」
「いってら。早く帰ってこいよ」
「怖がりの為に頑張ったるよ」
「超特急でな」
「はいはい」
「……わざわざ化けて出るなんて、一体何隠したんだよ婆ちゃん……これは茶碗か……こっちは……蓄音機？　なんでまた……これは掛け軸だし……壺は割ったら嫌だからパス。この箱は……桐なの？　木箱ばっかでわからんし。せめて箱のサイズ教えてくれないとホント探すのに困るし。開ければわかるってヤバい系なのかな……これは市松人形か。暗いとこで見ると不気味だなぁ……早くしまおっとせ」
「ただいま」
「うわぁっ！　……まじビビったし。おかえり、早く探すの手伝ってくれ」
「はぁ」
「ちょ、この箱どかすの手伝って」
「はぁ」
「たっだいまー」
「え？」
「え？」
「柚、箱持ってる奴、誰？」
「「……」」
「「でっでたぁーっ！！」」
「……脅かす気はなかったの。ごめんなさい……」

蔵の夢（後書き）

題：電池、見つかった、ごめんなさい

２００９０３１６：初出（三題噺参加作品）　２０１１１１１０１：移植　２０１１１１２３：編集

蔵の外（前書き）

内容としては前作「蔵の夢」の続きになっています。

蔵の外

「はぁっ、はぁっ」
「はぁっ……はぁ、も、だい、じょぶ、だよな」
「と、思う、よ」
「柚、お前、なんで、間違ったんだよ」
「だって……見た目、祥(しょう)と一緒、だったんだもん」
「だからって普通、従兄弟とお化け、間違えるか？」
「足があったんだよ。声も同じだったし」
「……お化けって、足あるんだ」
「そもそもお化けじゃなくて、狐狸かもしれんよ」
「あぁ、俺に化けてんだもんな……」
「だろ？　化けられたら、俺だってわからんよ」
「そっか……柚、御題目、効くと思うか？」
「オダイモク？」
「南無妙法蓮華経」
「え、お前日蓮宗だっけ？」
「や、無宗派」
「じゃあなんで知ってんの」
「変な事対策。相手が妖怪とか幽霊だったら、お経とか退魔法が効くかと思って覚えた」
「……お前、涙ぐましい努力してるな」
「あら、二人とも何してるの？」
「伯母さん！」
「母さん！　大変なんだよ！」
「それはいいニュース？　悪いニュース？」
「どっちかっつーと、悪いと思う」

「あらやだ。じゃあ聞きたくないわ」
「いい年こいた大人が耳塞いで駄々こねるなよっ。蔵に出たんだってば！」
「蔵に？　柚くん本当？」
「あ、はい。その、祥そっくりに化けたのが……」
「祥そっくりなの？　どうせなら柚くんそっくりのがいいのに」
「どういう意味だよ、母さん」
「まぁま、それは置いておいて。そっくりさんが出たのよね？」
「はい」
「じゃあ、お赤飯炊かなきゃね」
「はぁ？　なんで蔵に出たらめでたいんだよ！」
「あら、あなたたちには教えてなかったかしら？」
「何を、ですか」
「蔵の北壁、ノートくらいの凹みがあるでしょう？」
「あ、小さい神棚みたいなのと燭台が置いてあった」
「それね、たまに蔵に出るおかがみさまを祭ってるのよ。それで、おかがみさまが出たらお赤飯炊いて、お帰りを祝うの」
「……それ、妖怪？　お化け？」
「座敷わらしみたいなものじゃないかしら。おかがみさまがお戻りになるの、何十年ぶりかしら。お赤飯炊いたら、祥と柚くんで蔵に置いてきてね」
「えっ、なんで？」
「化けられた人と出会った人がお赤飯を置くのが風習なのよ。じゃあお願いね」
「「えーっ！？」」

蔵の外（後書き）

題：お題、壁、ニュース

２００９０３２９：初出（三題噺参加作品）　２０１１１１１０１：

移植　２０１１１１２３：編集

蔵の奥（前書き）

内容としては前前作「蔵の夢」前作「蔵の外」の続きになっています。

蔵の奥

「柚、先行けよ」
「やだよ。祥が赤飯持ってんだから祥が先行きなよ」
「母さんが無理矢理俺に持たせただけだし。ほら、扉開けろって」
「はいはい。あー早くしないと時間が」
「何の時間？」
「逢魔が時」
「そーいうのやめろって。冗談にならん」
「本当は時代劇の再放送」
「え、お前あんなん見てんの？　しっぶー」
「勧善懲悪の時代劇は日本の伝統だ。見て何が悪い」
「悪者倒して印籠突き付けてこの紋所が目に入らぬかーってワンパターン、飽きねぇ？」
「飽きんよ。ほら祥、ゴー」
「……行きゃいいんだろ。柚、しっかり照らせよ」
「もち。北の壁って一番奥？」
「そ。階段裏」
「へー。おかがみさま、かぁ……聞いたことある？」
「全然。文献でも絵でも見たこともなし」
「だよなぁ。局所発生型妖怪とか？」
「なんだそれ。ほら、あそこ」
「あ、あれ。確かに神棚っぽいね」
「置いて帰ればいいんだよな？」
「たぶん。燭台には脇に行ってもらって……ほら、祥」
「これでいっか。じゃ、さっさと出よーぜ」
「だね。婆ちゃんには悪いけど、捜索は延期で」

「お赤飯なんて幾年ぶりでしょうか」

「「うわぁっ！」」

「まぁ、そのように魂消ないで下さいな。先刻は私が悪かったのですけれが」

「でっ、でたっ！」

「あの、私の話、聞いてらっしゃいます？」

「狐の面かぶってらっしゃる……」

「男子でしょう、静かになさい。あまり口喧しいと祟りますよ」

「ひぇっ」

「あっあの、おかがみさま、ですか？」

「おかがみさま……ああ、久しく呼ばれていなくてすっかり忘れてました。此処の方達はそのように呼ばれますね」

「……えっと、神様、ですか？」

「神なんて大層なものではありませんよ」

「妖怪って祟れるっけ？」

「妖怪ではありませんよ。祟りは口から出任せです」

「「……」」

「嗚呼、此処のお赤飯はやはり格別ですね」

「……マイ箸で食べてるし」

蔵の奥（後書き）

題：崇り、時間、絵

２００９０５０３：初出（三題噺参加作品）　２０１１１１１０１：移植　２０１１１１２３：編集

増える管轄外

藍色に染め抜かれた居酒屋の暖簾を潜ると、既に面子が揃っていた。
「おー、おかえり」
「残業、お疲れ様です」
「というかフライング残業よね。こっち来て飲みましょ？」
飽きるぐらい見慣れた面々に呼ばれ、いつも使っている掘炬燵の定位置に座った。
「佐保（さお）もお疲れ。二人はまだ暇なんだろ？」
何も言わなくても運ばれてきたジョッキを持ち、まず一口流し込む。炭酸の痛いような感覚にキンとした冷たさ、その後から苦みが追い駆けっこをして喉を通り、胃に落ちた。
「まぁね。まだあたしの担当じゃないもの」
チーズを摘みながら、横の竜田（たつた）がお気楽に話す。
「俺もだな。おかげでぐーたら生活してるよ」
斜め前の将軍はお猪口に少しずつ口を付けながら言う。既に朱に染まった白い肌から、長時間この店にいることが予想できた。羨ましい限りだ。
「だよな。なんか毎年仕事が増えてる気がするんだけどさぁ」
ふぅ、とつい溜息が口を突いて出る。
「そうですね。年々私のが減って、筒井（つつい）さんの仕事になってますもの」
カルアミルクを片手に佐保は眉を曇らせる。
「今は私の担当の筈ですのに、筒井さん大活躍ですものね」
「こっちは大迷惑だよ。長時間働いても得なんて何一つない。あーあ、人間全滅しないかな」

焼き鳥に噛り付くと、香ばしい醤油の味がした。
「それは無理だろ。あ、今って俺の管轄外のインフルエンザが流行ってるらしいな」
「ああ、ラジオでちらっと聞いた。もっと盛大に流行ってくれないと人口減らないんだよなー」
今も待っている山積みの仕事を思い出し、ついぽろりと本音が出てしまった。
「何不吉なこと言ってんのよ。あんたそれでも神様？」
ワイングラスを傾けていた竜田から、背中に強烈な平手打ちを食らった。
「痛っ！　冗談に決まってるだろ」
半分くらい本気が混じっていたのは秘密だ。ジョッキの中の残りを呷り、早々に席を立つ。
「もう行くわ。まだ仕事あるし」
三人を残し、居酒屋を出た。

「神様業も大変ですよね。特に筒井さんの夏は」
「人間の地球温暖化とかいうやつのせいだろ？」
「日本地区担当とはいえ、出番増えすぎよね」
四季を司る神々は、溜息を吐いた。

増える管轄外（後書き）

題：残業、ラジオ（ラヂオ）、インフルエンザ
２００９０５１３：初出（三題噺参加作品）　２０１１１１１０１：移植　２０１１１１２３：編集

※ちょっと短いうえに描写が少なくてオチがよくわからなかった人のための簡単解説。
佐保（女）→春を司る佐保姫（さおひめ）
筒井（男）→夏を司る筒姫（つつひめ）
竜田（女）→秋を司る竜田姫（たつたひめ）
将軍（男）→冬を司る白姫（しろひめ）（名前は冬将軍からとりました）
ということで、日本の四季を司る神様たちの愚痴大会、ということでした。

さよならくるくる

――パチンっ！

夢現で聞いたのは、幻聴か、現実か。

僕は寝返りをうって、再び布団の海に沈み込んだ。

「おはよ……」

昨夜の暑さのせいで、大量に出た寝汗でぺたりと身体に張りついたパジャマを剥がしながら、妻と娘のいるリビングに入った。

「おはよー。早く着替えて……きゃあぁっ！」

「んなっ、何！？」

僕を見た妻の笑顔が引きつり、悲鳴が朝のリビングに木霊する。

「かっ、顔、血が出てるっ！」

口に手を当てたまま走り寄ってきた妻が、泣きそうな顔で僕の頬に恐る恐る触れる。

「え、どこ？　全然痛くないんだけど」

そっと触れてきた指は、血がついているらしい部分を上下するが、痛みも引っ掛かりもない。

それは妻も同じようで、泣きそうだった表情はいつのまにか不思議そうに眉を寄せていた。

「……血がついてるだけ、みたい……」

「えぇ？　昨日、誰か怪我した？」

「ううん……あーちゃんだって怪我なんてしてないはずよ……」

ベビーチェアに座って、朝食を食べる気満々でスプーンを握った娘の方に近寄り、二人で小さな体を隈無く点検してみる。

顔には何もない。
そのまま首、肩、腕、スプーンを放させて紅葉のような手のひらを見る。
「あ」
スプーンを握っていた右手に、既に乾いた血がこびりついていた。
「やだっ、いつ怪我したの！？」
それを見た妻が顔を青くして手のひらに顔を近付ける。
「……あれ？　何この黒いの」
「え？」
「これ」
そう言って指差された先にあった、手のひらの乾いた血の真ん中の黒い点。
よくよく見ると、足があって、羽もあって、黒と白のしましまで。
それは、ぺちゃりと潰れた……。
「これは……蚊、だな」
「……あーちゃん、パパのお顔、パチンしたの？」
小さな娘が、僕を蚊の被害から守ってくれていたらしい。
この際、この血が誰のか気にするのはやめることにした。

その後、娘の手のひらと僕の頬を、少しぬるい水で洗い流した。
娘によって見事昇天した蚊は、くるくると渦をつくる水と一緒に、排水溝へ吸い込まれた。

さよならくるくる（後書き）

題：パチ（パチンコ）、昇天、昨夜
２００９０７３１：初出（三題噺参加作品）　２０１１１１０１：移植　２０１１１１２３：編集
※同じタイトルでこの作品の改訂版もございますので、興味のある方は投稿作品一覧をご覧ください。

虚空の人

「亜弓、別れてほしいんだ」
こんがらがった赤い糸に悪戦苦闘していた僕に聞こえたのは、先輩の一言だった。
同時に団子状になっていた赤い糸はするりと解け、別れを決定付ける。
また間に合わなかった。
物陰で溜息を吐く僕に涙目で抱き付いてきたのは、姉の亜弓だった。

鼻をぐずぐずいわせて隣を歩く姉の小指からは、途切れた赤い糸がだらりとぶら下がっている。
これで姉の連敗記録は片手を越えた。
他人の赤い糸を見て触ることができるのを利用し、相手のいない赤い糸に姉の糸を結び付けても、結局解けてしまう。
やはり作為的に宛行った相手は、本当の運命の人には勝てないのだろうか。
死んだ相手にいつまでも運命の糸を繋げたままの姉を見ていたくなくて、始めたこの行為。
すればするほど、虚しい気持ちになっていく。
姉の赤い糸がふいに宙に浮き、するすると空に向けて伸びていく。
赤い糸は雲一つない空へ吸い込まれていった。
どこまで伸びたのか見えないくらい、長く長く伸びて天に昇る、死者と繋がる赤い糸。
いつか姉が彼のことを思い出にできる時がきたら。

その時はきっと、静かに途絶えるのだろう。

虚空の人（後書き）

課題文：その時はきっと、静かに途絶えるのだろう。

２００１０７１５：初出　２０１１１１２３：移植

お荷物届きました

バカみたいな着声で、滝のように汗をかいた俺は惰眠を妨害された。
うつ伏せのまま手探りで手を伸ばし、携帯を開く。
表示された名前は、バカをやる仲間だった。
「なんだよ、朝っぱらから……人が寝てんのに」
『ぐっもーにん。もう十時過ぎたぞ』
窓を見れば、カーテンから朝日とは色の違う光が差し込んでいた。
「で……用は？」
『荷物送ったからさ、受け取ってくれよな』
「荷物？」
『そ、でっかいやつ』
うつ伏せがキツくなって、仰向けに体勢を変える。
「うちにそんなん置くスペースはない。拒否るぞ」
『それは困る、ナマモノだし』
「ナマ？　……そういやお前、ここんとこ見なかったけど何してたんだ？」
沈黙するあいつの向こうから、ガタガタと音がする。
車で移動している最中なのだろうか。
「……まぁいいや。いつ着くんだ？」
『今日の午前』
「それを早く言えっ！」
怒鳴りながらおもわず飛び起きた。
『もーすぐ着くと思う』
ガチャッと携帯を通して大きな音が聞こえた。
「は？」

ぴぽーんと間抜けなインターホンが鳴るのに少し遅れ、携帯の向こうでぴぽーんと音がした。
『ま、着いたその時は、宜しく』

お荷物届きました（後書き）

課題文：その時は、宜しく。

２００９０７１６：初出　２０１１１１１２３：移植

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7801y/

掌編匣

2011年11月23日11時53分発行